



TITLE:

文獻目録を通して見た六朝の歴史意識

AUTHOR(S):

重澤, 俊郎

CITATION:

重澤, 俊郎. 文獻目録を通して見た六朝の歴史意識. 東洋史研究 1959, 18(1): 1-16

ISSUE DATE:

1959-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148137>

RIGHT:

東洋史研究

第十八卷 第一號 昭和三十四年七月發行

文獻目錄を通して見た六朝の歴史意識

重 澤 俊 郎

漢書藝文志は六藝・諸子・詩賦など六種の略に分けて文獻を整理したが、獨り史略を缺き、後世の概念において歴史の部に屬すと考うべき國語や史記の類を、すべて六藝略春秋の部に収録している。書物の分類は即ち學問の分類であつた以上、この事實は經史の概念が後世の如く明確に分離するに至らない狀態を反映したものに相異なるが、そこには歴史は單に過去の事實を記録に留めるといふだけのものでなく、むしろ未來に對して何等かの意味を有すべきであるといふ一箇の要請を内在せしめている。人間生活に關する最高の規範を論じたものは本來經と稱せられる一群の書であるが、歴史記錄は過去の事實の集積の中において自ら此と同じ機能を營むと見る思想が、史を經から獨立させない結果と爲つたのである。歴史に對する斯る考え方は決して班固や劉歆に創るのではなく、司馬遷が史記を作るに當つて、既に此の立場を取つたことは、太史公自序を改めて擧げるまでもなく疑うべくもない事實である。司馬遷以後、この歴史理念は最も根本的意味において長く史學を指導したが、しかし目錄學上漢志の分類方式が變更されて、史部の獨立が爲されたことに依つても容易に判斷される如く、歴史に對する思想は必ずしも常に固定していたとはいひ得ない。六朝人の撰著に係る三國志及び後漢

書が、等しく正史でありながら先行二史と頗る同じく無いものが有るのは、魏晉南北朝に於ける歴史思想の特異性を或る意味で現わしていると言つてよい。學問の他の分野に於いて然るが如く、史學に關しても此の時期には多くの注目すべき展開が爲されたのである。

X X X X

隋書經籍志は漢書藝文志と異り、經・史・子・集の四分類方式を確立した最初の文獻目錄であるが、試みに其の史部を見ると、

正史。古史。雜史。霸史。起居注。舊事篇。職官篇。儀注篇。刑法篇。雜傳。地理之記。譜系篇。簿錄篇。

の十三種に細分される。ここに著錄される文獻は凡そ八百七十七部、亡書を通計すると八百七十四部の多きに達し、漢志の僅か十一部に比して懸絶した數字を示す。これ程の歴史記錄が作られるに至つたことは、歴史として記述すべき事項が時代と共に量的に増加したことも勿論大きな原因に相異ないが、決して單に其れのみではなく、歴史に對する反省の深化、歴史意識の昂揚と關係する内面的質的問題を含むと見なければならぬ。

いま、此の十三分目の主なものに就いて其の性格を觀察すると、第一類の正史は史記以下南北朝諸國の個別的國史が収められていることは勿論であるとして、そもそも正史という概念を確立して他の古史雜史などと區別を明らかにしたのが隋志に始めることは、歴史意識の問題として輕視すべきでない。この類は史記を除けば殆んど全部が王朝單位の所謂斷代史によつて占められているが、ただ一つ梁の武帝の撰に係る通史四百八十卷が存するから、隋志の作者は通代斷代の差異を以て正史と否との別を決したとは言ひ得ない。また、史通の記す所によると、武帝の通史は秦以上は皆史記を以て本と爲し、兩漢以降は全く當時の紀傳を錄したに過ぎないことが明らかであるから、資料的價值において特筆すべき程のものでなかつたと判斷される。所が、此の書は通史でありながら形式は全く紀傳體を取り、ただ表を缺いた點のみが史記と異つていたと史通に見えることに注目するならば、この形式上の特徴が隋志の作者をして之を正史に屬せしめるに至つた理由

であつたと考えられる。これは編年體史を古史の名において第二類としたことから傍證されよう。隋志における正史の概念がかかる條件を伴つて定着したのは、史記・漢書を以て歴史の正統とする思想が確立されたこと、換言すれば馬・班の史學の權威が安定したことに大いに關係するものである。

史記漢書師法相傳、並有解釋、

という隋志の言は其の證徴と見られるが、これは史漢特に史記が漢代に於いて少くとも國家權力の側からは忌避されてゐた事實を思ふとき、非常な變化と言わなければならない。もつとも、史記學が漢書學に比して低調であつたことは、目錄に残る著述からも、隋志の文「史記傳者甚微」からも推察し得るが、嘗て列傳方式への意識が、歴史世界に於ける個人の活動が重要な意味を認識され始めた左傳↓戰國策の時期に在つて漸く高められ、そして其れが史記に於いて綜合的成熟を見せたのと同じく、後漢後半から魏晉を含む時期に於いて個人の意義が新たに認識された事實は、紀傳體史に對する新たな角度からの關心を自ら要請する一つの要素を爲していたと考えられる。

しかし編年體史を全く無用視するほど、六朝の歴史意識は單純ではなかつた。隋志をして一應は紀傳體史を以て正史と爲すと言わしめたものの、直ちに第二類に古史の目を置いて編年體史を著録せしめていたのである。隋志に言う古史は竹書紀年、荀悅の漢紀、習鑿齒の漢晉陽秋の如き類である。隋志は先ず、編年體史が司馬遷の出現によつて紀傳體史に取つて代られて後、荀悅に至つて再び復活された事實を指摘して、その執筆が學問好きな獻帝にとつて「漢書文繁難省」の歎あるに發する所以を述べ、續いて晋の太康元年に發掘された所謂竹書紀年が「皆編年相次、文意大似春秋經」を言い、そして最後に

同學者因之、以爲春秋則古史記之正法、有所著述、多依春秋之體、今依其世代、編而敘之、以見作者之別、と論じてゐる。之によつて當時の史家が編年體史に關して抱懷する所の一般の見解を察知し得る。それは竹書紀年の發見によつて異常に高められた意識であつたことは否定し得ないとしても、編年體という歴史敘述の方式そのものに就いて或

る基本的認識が無ければ發生する筈はない。この頃、晋の著作郎樂資が左傳の後を續成して秦の二世の滅亡に至るまでの春秋後傳三十卷を作つたのを始め、後漢紀晋の張璠・魏氏春秋魏の孫盛・宋略梁の裴子野・梁典陳の何之元の如き、皆編年方式を取つたことを、史通は傳えている。これは紀傳方式を一たび經驗した後の史學者が編年方式の意義を改めて再認識した結果であるから、史記成立以前の原始編年主義とは區別すべき性質のものである。荀悅が漢紀を著した直接の動機は獻帝の要望であつたとしても、獻帝が特に編年體史を求めたとも考えられないのみならず、むしろ荀悅自身が

荀悅厭其迂闊、又依左氏成書、剪裁班史、篇才三十、歷代褒之、
通史

と傳えられる如く、紀傳方式に甚だ批判的であつた事實は看過できない。歴史記錄の原理としての紀傳編年に就いては、劉知幾が夙く既に論議し、私も嘗て多少考えたことがあるので、今は深く論及しないが、編年方式が歴史を連續的變化の形において理解し、歴史世界の構造を正確に示し得る長所を有することは確かである。司馬遷が史記に多くの表を作つたのは、此の點における紀傳體史の缺陷を幾分なりとも補う意味も有つたと解せられる。隋志著錄の古史類は、竹書を除けば三十三種全部が荀悅以後の撰に係るから、編年方式の再興は後漢末以降に在るを知る。正史が班馬以來の傳統を荷うに對し、古史は或る意味に於いて三國以降の社會に原因を有する新しい歴史意識の所産であると稱して過言でない。

第三類の雜史は、古いものでは逸周書・戰國策、新しいものでは皇甫謐の帝王世紀や樂資の山陽公載記の類を収める。隋志の作者はその體裁の不經、從つてその内容が「有委巷之說、迂怪妄誕、眞虛莫測」の故を以て、之を一種の補助的記錄としてのみ待遇しようとする態度を明らかにする。つまり、隋志作者の胸底には、國家の史官が堅實に其の職掌を守つてゐる正常な状態の下では、此の種の記錄が作られる必要は生じないという基本的觀念が存するのである。この觀念は決して隋志に創るものではないが、雜史的記錄は既に左傳國語の素材とさえ爲つたと考えられ、周代以來普遍的に存在する。記錄としての形態内容は勿論、その意識に就いても一代の史學思想に關係する程の意味を荷うとは原則的に考えられない。

× × × ×

第四類は霸史であるが、注目に値するのは第五類の起居注である。ここに著録される文獻は穆天子傳・漢獻帝起居注に始り、以下晋泰始起居注・晋咸寧起居注・宋景初起居注・齊永明起居注・梁大同起居注・後魏起居注・陳永定起居注・隋開皇起居注など四十四部に及ぶが、晋以降陳に至る南北諸國の各年代についての起居注が、それぞれ獨立の形を以て編纂されている所に特徴がある。而して最初の二種が漢以前の名稱を有するのを除けば、すべてが晋代以降に屬すること、最初の二種も獻帝起居注の如きは實質的には漢代社會の產物とはいひ難いことは、一層特徴的である。起居注は隋志の作者も論ずる如く、君主の言語行爲の即時的記録で、本質的には漢書藝文志に

左史記言、右史記事、

と言ひ、禮記玉藻に

動則左氏書之、言則右史書之、

と定める所のもの、また

掌王之命、遂書其副而藏之、

という周禮内史の職掌にも連續する記録の形式に外ならない。左右の史官が、謂うが如く言と事とを分掌したことを明示する歴史的事實は現在は見當らないから、章學誠の如きは「禮家の衍文」と考へているが、君主の公的言行を史官が即座に記録に留める制度の存したことは、隋志に引く春秋傳^{莊二十三年左傳}を始め、決して其の例に乏しくない。これ君主の言行を

修飾すること無く其のまま記録に明記することに依つて、將來の鑑戒に資せんとする意味を荷う制度である。起居注に就いて隋志は、漢の武帝に禁中起居注があり、後漢の明德馬皇后に明帝起居注のあつたことを挙げ、「漢時起居似在宮中爲女史之職、然皆零落、不可復知」と言うに止り、その理念に關して論及する所が無いが、既に起居注的記録の製作に與る史職が歴史に於ける鑑戒理念の具現者であつたとするならば、三國以後に至つて起居注が飛躍的に盛行したのは、こういう理念そのものが異常な高まりを示した結果と判斷しなければならない。後魏の柳蚪が古代の左史右史の職掌に看取され

る鑑戒の精神から論を起し、

請自今諸史官記事者、皆當朝顯言其狀、然後付之史閣、庶令是非明著、得失無隱、使聞善者日脩、有過者知懼、
傳、本

と論ずる上書をしたのは、必ずしも起居注にのみ關する問題ではないとしても、要するに歴史のもつ鑑戒の理念に對する反省たるを失わない。この上書で、彼は漢魏以降記注が史官の手中で内密に作られる傾向を帶びて來た事實を指摘し、かくの如きは後世に對しては兎も角として、現在の社會に裨益する所無しと爲し、且つ假令史官が直書の精神を能く守りぬいたとしても、曲筆の疑念を抱かしむる餘地無しとしない點を強調している。つまり、彼は歴史に於ける鑑戒及び直書の精神を飽くまで保持しようとする立場から、當時の史職の在り方、並びに歴史記錄作製の手續きに就いて批判を加えたのであるから、彼の根本精神は起居注を支える其れと相通ずることは言を俟たない。柳蚪によつて代表されるような歴史思想は起居注を盛んならしめた一つの大きな原因をなしたのである。

隋志著錄の起居注のうち最初の二種を除けば、最も古いのは晋の泰始起居注三十卷であるから、晋は帝位に即いた初年から起居注が作られ、しかも續いて咸寧・太康・元康と、年號ごとに漏れなく獨立の起居注が作られている。而して晋一代の起居注を綜合したと考へべき晋起居注三百十七卷、重要記事の節錄と考えられる晋宋起居注鈔五十一卷の存在は、この種の記錄が相當大量に作製された實情の反映と見るべく、隋志が起居注を獨立の分目とした一の理由も此に在ると察せられる。宋の泰豫は僅か一年に過ぎず、昇明は二年に止りながら、その起居注がそれぞれ四卷六卷を數えるのは、記錄内容の詳密度を暗示すると言つてよい。事實の正確精細な記錄を残すと同時に、それに依つて鑑戒と拘束の目的を完うせんとする意識に導かれた歴史記錄が晋以降俄然その量を増し、且つ組織的規模に於いて作製されるに至つたことは、この時代の歴史意識の問題として注目されなければならない。

鄭樵の通志藝文略は、起居注の外に實錄會要の二種を加え、起居注と題する一項を立てる。狹義の起居注に収める所は隋志著錄のほか唐初二三部を附加するに止るが、實錄は唐及び五代に亘つて五十部を數え、唐以後實錄が起居注に代

つて盛行するに至つたことが極めて明瞭に看取される。藝文略に著録される六朝時代の實錄は僅か三部で、すべて梁のものであるが、その二部は隋志に在つては雜史に収め獨立の目を設けていない。此に依つて、實錄形式の記錄が南朝末期に發生し漸次起居注の地位を奪うようになった實情を知り得ると同時に、實錄の精神は起居注に連絡し、從つて更に遠くは左史右史に淵源することを察し得るのである。

× × × ×

起居注に續いて、隋志は舊事篇・職官篇・儀注篇の三目を設けている。これは其の名の示すが如く、國家または個人に關する官職典式制規故實の類で、大小廣狹の別は有つても共通の性格を具えるものである。此の三目凡そ百十一部のうち、直接漢代に關するものは僅か十部、明らかに漢人の撰に係るものは四部に止り、餘は撰者は悉く晉以後の人に係り、内容は悉く三國以降に關する點に着眼すれば、此の種の事項を書物として記錄しようとする要求が、晉以後に至つて急激に高まつたことが肯定されなければならない。そして舊事職官の兩者は國家の行政に關する公的な故實や制度の記錄と思われ、五十九部の儀注篇はやや性格を異にし、例えば徐爰家儀・嚴植之儀・趙李家儀の如く、純然たる個人の家法に屬すると考えられる記錄、また内外書儀・書筆儀・弔答儀・文儀・言語儀などの例に見られるような、日常社交の作法並びに教養に關すると考うべき文獻も存し、更に婦人書儀・僧家書儀の如き特殊な禮法を内容とする著述も有る。隋志の作者は儀注の性格に就いて、先ず

儀注之興、其所由來久矣、自君臣父子六親九族、各有上下親疏之別、養生送死弔恤賀慶、則有進止威儀之數、

と述べ、周禮大宗伯の五禮、叔孫通の朝儀、曹褒の漢儀など一類を爲すことを論じているが、問題は父子六親九族の秩序や養生送死弔恤賀慶の儀法は前世既に存するに拘らず、魏晉以後それが歴史記錄の一種として頗に多きを加えるに至つた點に在る。隋志は、儀注篇を史部の一目として立てなければならぬ理由に固より全く觸れていないわけではないが、然し「舊章殘缺」とか「或傷於淺近、或失於未達」とかいう如き消極的理由のみで、この種の文獻が盛行するに至つた所

以に就いて積極的な意義を探索していない。この種の文獻の成立は、その主たる内容を爲す所の儀式作法が極めて微細な點に及ぶまで洗鍊され固定化されて一般性を有する規範化すると共に、其の規範の上に自己の生存を托する階層が其の地位が安定するまでに成長したとと關聯する。後漢の後半から三國兩晉の動亂を経て、社會の新たな安定勢力が漸次成立しつつあつたことは事實であるが、彼等は其の成長するに従つて或る教養に基づく特別の規範を自らの生活秩序の中に要求し、且つ之を以て自己を他の階層から區別する一箇の優越的條件と爲すに至つたと解される。上流社會において、生活上の細かい禮法や典式などが一定の形に定着し、規範としての拘束力を有するようになると、彼等は其の拘束への柔順に快感と誇りとを覺え、遂に其の規範は傳統としての權威を逆にそれを作り上げた階層に對して發揮する。記錄に留めて其の權威を永遠なものにしようとする意識は、此の段階に於いて可能となる。儀注類が歴史記錄の一種として成立するのは、かかる社會的心理的條件を前提としていた。要するに六朝貴族の安定化と之に伴う諸規範の固定並びにその傳統化が、この新しい歴史記錄發生の一原因を爲したと言わなければならない。

X X X X

儀注類に於いては、貴族の家または個人を單位とする相互の關係が主たる意識對象と爲つていたことは上述の通りであるが、此の意識のもつ比重が歴史記錄の中に於いて増大した結果は、隋志に雜傳の名の下に著録されている二百十七部の述作にも影響する所があつた。隋志史部第十の分目たる雜傳は、益部耆舊傳・汝南先賢傳・江左名士傳・東方朔傳・王朗王肅家傳・太原王氏家傳・崔氏五門家傳・列女傳・神仙傳・高士傳・孝子傳などから、列異傳・搜神記・齊諧記の類までを包含する。通觀して大きく四種に細別し得る。第一は益部耆舊傳などの類で、地域別に有名人を對象とする記錄、第二は一家一氏或いは特定個人の傳記で、前記東方朔傳以下の四書の如きもの、第三は列女高士の例に見られる同一性格者の系統的傳記、第四は列異傳や搜神記の類を代表とする、何等かの意味で共通性を認め得る說話小説の集録である。第一種の文獻で疑い無く漢代に屬するものは、後漢の趙岐の三輔決錄及び圈稱の陳留耆舊傳の二部に止り、他は皆魏晉以後の撰

に屬する。第二種に關しては、例えば東方朔傳のほか、孔子弟子先儒傳のようなものも著録されているのみならず、隋志には見えないが鄭玄別傳の如きものの存在したことから推して、漢以前の人を對象とする記録が少からず作られたことは確かであろうが、然し撰者が漢代人たるを明記したものは隋志には一部も無く、少くとも撰者の氏姓を明らかに考え得るものは例外なく魏晉以後である。そして家傳の類に至つては、記事内容においても撰者においても全部魏晉以後になることを思う時、この種の歴史記録を多量に產出するに至つた社會的條件は略ぼ想像されるであらう。隋志の著者はこゝでも淵源を遠く古代官制に求めようとする態度を棄てず、周禮外史の「掌四方之志」の規定、左傳の「勳在王室、藏於盟府」の文などを根據として諸侯の國々の歴史文書が天子の專官の下に保存されていた事實を確認し、第一種の地域的傳記は、こゝうした周代以來の傳統的制度に本づく記録に外ならない所以を強調する。第二種に就いても同様の立場から解釋を與える。つまり周禮の族師・黨正など末端の地方行政官の職掌として、自己の管轄域内における有德者篤行者を定期的に天子に上聞する規定の存したことを指摘し、窮居側陋の士と雖も苟くも言行の見るべき有る者は必ず其の爲めに史傳が作られる制度が元來存在したことを力説する。かくの如く、隋志の作者は第一種第二種の文獻は歴史的に見て新しい形式とは爲し得ず、むしろ周代の制度に由來する傳統的形式を踏襲する記録に過ぎないものと斷ずるのであるが、これは本質を逸した解釋と言わざるを得ない。周禮に言われる第一種並びに第二種的な記録の作製は、當然統一國家の官吏の責任に於いて爲される以上、形式的には六朝のそれと類似性を有するとしても、精神的には截然と區別されるべき性質のものである。また隋志がいま一つの根據とする左傳の記事も、亦同じ理由によつて在野個人の著述とは原則上同一には論じ難い。當面の問題たる二種の歴史は個人の自由意志の下に於いて作られ、國家的な判斷や行政に寄與する意欲などは伴つていない筈だからである。それは程度の差こそ有れ、國家權力とは本質上無關係に、社會を動かす歴史的諸要素や原動力などに對する獨自の認識に支配されている。隋志収載の夥しい個人傳や家傳を通覽すると、周禮に言われる如き德行が其の全部に前提條件として認められているとは到底考え得ない。これ歴史意識の根底に於いて彼此距離の存するが爲めに外ならない。それ

を形式的類似の故を以て同一視し、その時代的特徴を故らに過小視する隋志の態度は、首肯し難いものである。

列女神仙高士など、同じ性格者の合同列傳と稱すべき第三種は、漢代正史にも既に同じような列傳が見られ、また劉向に列仙列士などの專著が有ることを承認すれば、必ずしも六朝の特徴的所産とは言ひ得ないが、その内容が廣範圍に亘つてきた點は注目されて可いと思う。例えば列女に就いても、劉向の書以外に同名同類の書が隋志のみで九部を數え、更に女記・妬記・美婦人傳の名を見るに至つては、婦人が貞烈という點のみで歷史上特別の存在意義を與えられた往古とは、かなり異つた觀點から取り上げられるようになったことを感ぜしめる。列異傳・搜神記などより成る第四種は悉く三國以後の作で、魏の文帝の列異傳が最も古い。此の書は隋志の記す所によると、「鬼物奇怪の事を序する」ものであつたらしいが、同列の他の書物も其の名稱並びに一部殘存の斷片から推して、隋志に所謂「雜うるに虛誕怪妄の說を以てした」と判斷される。かかる内容を有する記録が史部の一目たる地位を主張し、且つ多量に存在するのは、隋志の特徴的現象である。漢書藝文志にこうした性質の文獻が餘り著録されていないのは、固より色々の理由に因ると思われるが、虛誕怪妄の説話は歴史内容を形成するに足りないという考え方と深く關聯することも否定できない。漢志の小説十五家を始め陰陽五行や雜占などの部目には、今日から見れば虛誕怪妄に涉ると認むべき文獻も絶無ではないが、數に於いて隋志に比すべくもないのみならず、其の多くは怪異の説それ自體を遺さんが爲めの撰述とは考えられない。その思惟が甚だ非論理的であり不合理な要素を含む意味において虛誕と言へるとしても、依然として其れなりの理法によつて或る眞理を明らかにしようとする目的に志向すると見て大過あるまい。漢志の小説家類の中には隋志のこの部目の書と共通性を有すると推定される書も含まれているが、これも班固の「街談巷説、道聽塗説」の言に表明される如く、必ずしも内容の怪異性を第一義的條件として成立するものではない。鬼物奇怪の事を序するを以て使命とした隋志の第四種は、この意味からしても新しい文獻と言うに値する。鬼物奇怪の事が存在する世界は、當然人間の現實社會ではない。かかる世界に特別の關心が拂われ、かかる世界の實在性が強調されたのは、後漢末から魏晉にかけての一つの特徴的現象で、神仙への憧憬が齎した神

仙世界實在論やその世界構造に關する觀念などが、この時期において異常な展開を示したのとも相通するものである。列仙傳や神仙傳は、この非實在在世界實在の觀念を媒介として成立した著作に外ならないが、そこでは神仙が實在生活すると信じられる世界は、人間の現實世界とはそのままでは重なり合わない別の空間に於いて成立すると考えられている。神仙思想においても、此の重なり合わない二つの空間を重なり合うものとして成立せしめようとする欲求が漸次強まると、之に答える如く市朝に隠れる仙人の可能性が問題とされるに至つた。普通の人間世界に在つて、俗なる人間と同じ生活様式の中に得仙の可能性が承認されれば、仙と俗との二つの空間は最早差別を立てるべき根據を喪失したと稱して可い。換言すれば、嘗て人間世界の外に在ると信じられた世界が、人間世界の中に取り入れられて其の一部を形成すると考えられるように爲つたのである。かような思想上の變化は、當然神仙が人間の歴史において有する所の意味に對する評價の變化を、連動的に惹起せずには措かない。從來歴史の世界で殆んど顧みられなかつた神仙に關する記録が、隋志で頗る増加した主な理由の一つは、ここに求められなければならない。此の事は更に一般的に言えば、從來は人間の歴史の一部を形成すると考えられなかつた世界の問題が、新たに人間の歴史の一部を爲すと考えられるように爲つた意識の變化を示すと謂わなければならない。搜神記などを除けば、殆んどの文獻が其の内容を知り得ないが、列異傳以下の此の種の記録が歴史の一部たる地位を占めているのは、神仙の場合と同じく、奇怪虚妄と思われる事實や説話もやはり人間の歴史の内容と爲り得るという觀念を前提として、始めて可能なことに屬する。奇怪虚妄と認めるのは人間の判斷能力によつてであるが、其れが歴史の一部を爲すと認容すると否とも、亦人間意識の問題に外ならない。魏の文帝が故らに鬼物奇怪の事を序したのも、隋志の著者が此の一群の文獻を雜傳に収録したのも、同じ歴史意識の發展に關係しているのである。

× × × × ×

隋志史部の最終分目たる簿錄類は、劉向の別錄以下三十部の文獻目錄を主體とする一群である。漢人の撰に係るのは別錄と七略のみで、他の二十八部は悉く晋以後の作であるから、此の種の文獻も六朝に於いて盛んに作られたことがわかる。

ところで、漢から六朝にかけての文獻目錄には、分類構成の點から見て二系統があり、且つ二系統の分立が歴史記錄の取り扱い原則に關して現れて來ている事實は注目されなければならない。

現在の漢書藝文志に其の原形が遺る劉歆の七略が、集略以下方技略に至る七分類の方式を取り、獨立した史部を設ける代りに、今日の概念で正統的な歴史と認められる國語・戰國策・史記の類を、すべて六藝略春秋類に収めている事實に着目するとき、歴史記錄を作ることの意義とか史學の本質が、七略の作者の時代に一般に如何に考えられていたかを察知するに難くない。つまり、歴史の書は形式の上に於いて六藝・諸子・詩賦などと對等の比重を與えられず、歴史學そのものも實質上獨立した存在意義が猶お十分に承認されるに至らなかつたと謂うの外は無い。後世歴史學に期待する所の獨自の機能は、之を春秋學に求めようとする意識が支配的であつたからこそ、歴史の書を春秋類の末尾に著録するという形態を取つたのであるから、必ずしも歴史が輕視されたことではないにしても、歴史學における主觀主義の一面が非常に強調されていたことは否定できない。此の意味において、歴史の獨立性は十分に承認されるに至らなかつたと言つて可いのである。然るに隋志簿錄類に見える書物の分類原理を追求すると、七略に示された經史未分化の思想が徐々に變化してゆく迹を捉えることに成功する。劉歆の後、魏の鄭默が秘書郎と爲つて中經を作つたことが隋志に見える。つまり中秘の書籍の整理事業である。この場合鄭默がいかなる原理によつて整理を行つたかは、直接に據り所となすに足る明文は無いが、晋の荀勗の新簿との關係を考えると、鄭默に新しい原理の發生を求めて必ずしも無理でないように思われる。隋志は鄭默の事を記したのに續けて、直ちに、

秘書監荀勗又因中經、更著新簿、分爲四部、總括群書、一曰甲部、二曰乙部、三曰丙部、四曰丁部、

と述べているから、新簿が四部分類の法を取つたことは疑う餘地は無く、しかも其れが中經に因つて著わされたと言われる點に着目するならば、鄭默の中經が既に四部分類方式であつたと推定されよう。さて新簿に於いて確立された四部分類方式の具體的内容を隋志に求めると、

一曰甲部、紀六藝及小學等書、二曰乙部、有占諸子家近世子家兵書兵家術數、三曰丙部、有史記舊事皇覽簿雜事、四曰丁部、有詩賦圖譜汲冢書、

とある。後世の經史子集の分類に比べればやや出入が有るが、史記舊事などを内容とする丙部の獨立に依つて歷史記錄の比重が増大したことは特筆に値いする。さらに、「東晉の初め、著作郎の李充は甲乙を以て次を爲し、爾後因循して變革する所無し」と、隋志に見えるのに徴すれば、鄭默に端を開いた四分方式が大體晉代の後半に至つて安定を得たと考へて差支え無いようである。宋の謝靈運に四部目錄が有り、齊の王亮・謝朓に四部書目が有つたという記事、また梁代にも任昉や殷鈞によつて四部目錄が撰せられた事實は、すべて史部を獨立に待遇する意識が漸次優勢と爲りつつあつた證據である。後に隋書經籍志が同じ意識において經史子集の四分方式を採用して以來、歷代正史のそれを含む總ての文獻目錄の基本方式として固定するように爲つたことを想うと、魏晉の間に於ける此の轉換は洵に歷史的意味を荷うと言わなければならない。しかし、之に依つて舊來の七分方式が全く滅亡したのではない。隋志によると、宋の王儉に七志の撰が有り、梁の阮孝緒に七錄の撰が有つたのは、これを示すものであるが、ただ其の項目に就いて注目すべき變化が現れ、決して漢代の七分法そのままの方式を墨守したのでないことが明らかに看取される。例えば阮孝緒の七錄は、隋志によれば、

一曰經典錄、紀六藝、二曰記傳錄、紀史傳、三曰子兵錄、紀子書兵書、四曰文集錄、紀詩賦、五曰技術錄(七錄自序作術技錄)、
紀術數、六曰佛錄、七曰道錄(七錄自序作佛、法錄仙道錄)、

とあるから、劉歆七略の項目とは大いに異り、史部は名實ともに獨立の地位を與えられている。此より古い王儉の七志は第一目の經典志の中に史書を同居させていたが、尙お「紀六藝小學史記雜傳」と言い、歷史記錄を春秋類に埋没するような方式は取らなかつたことが明らかである。つまり此等は七分方式を傳統上維持しながらも、歷史記錄の分離獨立という大勢から影響されずには濟まなかつたのである。阮孝緒は七錄の自序において、上記のような項目による七分方式を採用するに至つた理由を説明しているが、そのうち、紀傳錄に就いては

劉王以衆史合于春秋、劉氏之世、史書甚寡、附見春秋、誠得其例、今衆家記傳、倍於經典、猶從此志、實爲繁蕪、且七略詩賦不從六藝詩部、蓋由其書既多、所以別爲一略、今依擬斯例、分出衆史、序記傳錄、

と言う。詩賦略が漢代から獨立したのも其の書が多い爲めであつた如く、史書が盛んに撰著される現在に於いては、之を獨立の分目にしなければ目録としての處理ができない、というのが主たる理由であつた。文獻の量的認識に止つて、質の問題即ち歴史記録を盛行せしめた意識の問題には、表面上全く觸れていないわけであるが、假令言葉通りに解して目録技術の問題として考えてみても、阮孝緒をして量の増加を率直に分類方式の上に反映せしめた所以のものは輕視されてはならないのである。

人間そのものに對する根本的な反省、豊かな人間性への憧憬は、魏晉精神文化の基調を爲すものであつた。それは當然、如何にしてよりよく生きるか、如何にして人間生活の内容を豊富にすべきか、という欲求と相互に關聯して展開される。この時期に於いて、文學や藝術の世界に在つて、從來その中に取り入れられなかつたものが續々と取り入れられて、新たな領域を開拓していったことは指摘するまでもない。精神生活の内容が種々の形で擴大充實されたとすれば、史學の分野に於いても歴史の世界の擴大に關聯を有する新しい著述が爲されたとしても、何等不可解ではない。史部の書を目録の上で獨立せしめるに至つた直接の原因たる歴史記録の量的増加の實相を検討すれば、それは既存形式を取る記録の増加もさる事ながら、新形式の發生に負う所が少くない。量の問題が直ちに質の問題になり得たのは、上に述べたような歴史そのものに對する觀念の變化が然らしめたのである。

× × × × ×

隋志の正史の中に、通史四百八十卷（通志藝文略は六百二卷とす）と稱する一書が見えることは前に述べた。此の書は梁の武帝の撰に係り、三皇に起り梁に訖る範圍の記録であつたと言われる。史通は此の書を六百二十卷と爲し、

其書自秦以上皆以史記爲本、而別採他說以廣異聞、至兩漢已還、則全錄當時紀傳、而上下通達、臭味相依、又吳蜀二

主皆入世家、五胡及拓拔氏列於夷狄傳、大抵其體皆如史記、其所爲異者、唯無表而已、

と傳えているのに依つて、大體の構成は髣髴し得よう。梁書武帝紀は此の書が武帝の末期の清二年に成つたこと、並びに武帝が自ら贅序を作つたことを記録する。而して吳均傳に、

均免職、尋召撰通史、起三皇迄齊代、均草本紀世家、功畢、列傳未就卒、

と見えるから、吳均が實務に携つたと考えられるが、しかし、通史撰著の意志は固より武帝に出で、その發意はまた當時の史學の動向に關係する現象と言わなければならない。六朝時代は獨り梁に限らず一般に史學への關心が高く、既に宋の文帝は裴松之をして三國志の注を作らしめたのみでなく、儒學館・玄學館・文學館と並んで史學館を立て、何承天をその責任者として史學専門の學校を設立しているし、明帝は泰始六年に總明觀を立て、「舉士二十人、分爲儒道文史陰陽五部學」と言われるから、史學を獨立の一科として待遇する措置を講じたわけである。これ等は何れも史學が一つの領域を有する學問と認められて來た一般情勢を反映し、隋志史部に著錄する文獻の吟味を通して得られた結論と符節を合すると言つてよい。梁の武帝は斯る趨勢の下に於いて通志の編纂を企てたのであるが、彼が人に語つて、「此の書若し成らば衆史廢すべし」と曰つた事實から察すると、最高の權威を以て自任した態度が見える。通史に對するかかる絶大な期待は何に由つて得られたかを考えるに、此の書は上にも一言した如く、漢代までの記事内容においては、綜合的特徴は存するとしても、新たに未知の事實を附加したり不詳に歸した問題を考證したと考へべき要素は無い。また三國については吳蜀二主を世家に収め、更に五胡や拓拔氏を夷狄傳に列したと稱せられるが、前者は三國志の精神を繼承したに過ぎず、後者も異族に對する中夏主義の結果と見れば、必ずしも此の書の獨創とは爲し得ない。既に然る以上、武帝が此の書に寄せた期待と誇りとの根據は、主として通史という形式そのものに求めなければならない。劉知幾は通史を六家のうちの史記家に入れてゐるが、斷代史でない點と紀傳體を採つた點とに於いては確かに史記と共通の性格は存するが、兩者が其の理念までも全く同一であつたとは定め難い。紀傳體史の登場によつて一度び退けられた編年體史は漢紀の現出を境として再び新

しい精神の下に復活したが、晋の樂資の春秋後語を除いては總て斷代の歴史のみで、通史の形を取つたものは一も無い。紀傳體史においても通代史の制作を見なかつたことは勿論である。樂資の作も、もともと戰國策や史記を資料として春秋と漢との空隙を塞ぐ目的を有するものであつたから、十分な意味において通代史の條件を満す自覺が存したか否か疑わしい。目錄に就いて見ても、漢志は固より隋志に在つても、通代の歴史が現れた證據は認められないのであつてみれば、梁の武帝の通史六百餘卷が史學として全く新しい構想の下に創案されたと考へべき理由は十分にあると言つてよい。記事内容の更新附加を圖るべき餘地が殆んど無い狀態の下に在つて、猶お且つ上古以來の通史を編しようとする意欲と期待とが強く武帝を刺戟したのは、要するに現代に對する歴史的認識が彼において高まつた爲めに外ならない。自己の生存する現代の有する歴史的意義或いは價值に對する反省が深められた場合、現代が如何なる歴史的積層の上に成立するかを明らかにすることを以て之に應えようと思へるに至つたのは、決して不可解ではない。武帝の精神はここに存する。天子として南朝に於ける最大の國家權力を掌握し最大の天下意識を抱懷し得た彼が、高級貴族たる自己一身の存在意義を反省しただけでなく、歴史的回顧の念を惹起するに十分であつたであろうが、廣く梁の國家、更には全天下を視野に収めた時、かかる構造をもつ歴史的現在に就いて、より深く歴史的究明を加えようとする欲求を生じたのは當然と言つてよい。斷代史や部分的時代史は、この種の欲求には決して十分には貢獻しない。獨り上古以來の通代史のみが、現代に至る歴史の積層を解明する意味に於いて、この欲求に直接應へることが可能であつた。武帝が經及び諸子の書に關する多くの業績を残したのは、之を可能ならしめた社會的條件と彼自身の豊富な學殖に大いに關係しているが、しかし根本的には彼の現代に對する意識の問題が存すると思われる。經子の注解がそれを現代に生かす道であるとするれば、衆史を取捨して新たに通代史を作る精神と相通する。武帝が通史に於いて事實上の編纂は學者に任せながらも、獨り贅序のみは自ら手を下したと言われるのも、この部分に自己の史論を開陳する自由が存し、通史の荷うべき重要な使命を托し得るからである。

(一九五九年五月)

Historical Consciousness in the Six Dynasties as Seen in the History Section of the Bibliography of the Sui-shu 隋書

Toshio Shigezawa

All historical records are written on the basis of the author's consciousness of history. The present writer will study the historical consciousness of the Six Dynasties by analysing the character of the works in the Sui-shu ching-chi-chih shih-pu 隋書經籍志史部.

1. The importance of chronological histories, once replaced by annal and biography type histories, was once more recognized. It was admitted that chronological recording also may exactly explain the structure of history.

2. The compilation of the T'ung-shih 通史 by Emperor Wu 武 at the Liang 梁 Dynasty was supported by his respect for the contemporary age.

3. The prevalence of ch'i-chü-chu 起居注, day by day records of the emperor's daily life, shows that the idea of preserving accurate records and instruction by it had arisen.

4. Changes in the understanding of history made it possible to write imaginary and fictional history which had not previously been thought to be the object of historical recording.

5. The appearance of an independent shih-pu or history section in the bibliography reflects the changes in historical recording and further in the consciousness of history.

On the Bodyguards of the Warlords in the Six Dynasties

Hideo Kikuchi

Types of corvée in the T'ang 唐 Dynasty, such as fang-ko 防閣, pai-chih 白直, ch'in-shih 親事, chang-nei 帳內, chang-shên 仗身, sui-shên 隨身, etc., have their origin in the Six Dynasties. Those who were engaged in this kind of corvée were at that time the entourage organized as body-